

IMAJ

発行年月日 1994年6月30日
発行所 (社)国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102

ニュース
NO.74

TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発行人 住友 義輝
頒 価 1部200円

●世界家族の仲間入り ●信頼できる人との出会い ●新時代に必要な情報 ●心身の健康 ●問題解決の秘訣

●世界家族の仲間入り ●信頼できる人との出会い ●新時代に必要な情報 ●心身の健康 ●問題解決の秘訣

三百五十名が参加した 今回のセミナー

第二回MRAカンボジア国際セミナーは、三月十九日と二十日にプノンペンで開催された。長年和解と復興の基盤となる国民相互の信頼作りや、モラルと民主主義の啓蒙活動を各国で行なってきたMRAは、国連主導の総選挙を直前に控えた昨年三月に第一回目のセミナー「カンボジア和平のための信頼作り」を開催した。九つの政党の代表、明石国連代表代理、学生、僧侶、

MRA国際会議レポート



＝第2回MRAカンボジア国際セミナー＝

「社会変革の鍵となる心の変革」

共催

国際MRAカンボジア協会
カンボジア人権協会

□会場：ホテル・カンボジアーナ

□日時：1994年3月19日(土)～20日(日)

NGOの代表など二百名が参加したこのセミナーでは、平和を望む熱い発言が相次ぎ、選挙で90%に及ぶ高い投票率をもたらした「ピープル・パワー」の勝利を予感させるものがあつた。参加者の多くは、新政府の閣僚に就任したり国会議員に選出されたが、これらの人々を中心にモラルに基づいた国造りを推進しようとの気運が高まり、国際MRAカンボジア協会（レニ・パン会長・IMAJニュースNo.71参照）が昨年設立された。そして、国連撤退後のカンボジ

主な内容

MRA国際会議レポート

1P

「社会変革の鍵となる心の変革」
＝第2回MRAカンボジア国際セミナー＝

報告

5P⇒15P

荒井千香子、堀本崇、大塚禮子

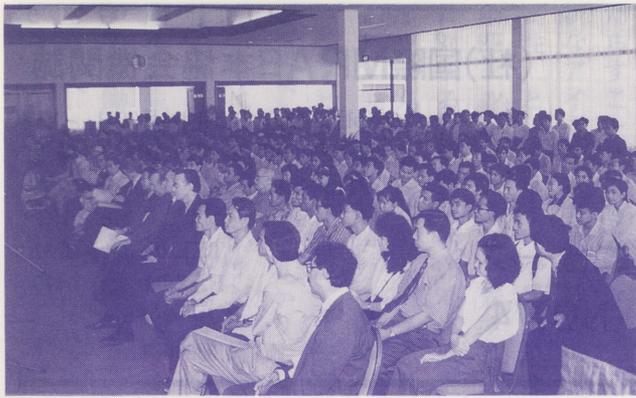
コ－円卓会議(CRT)報告

16P

CRT中間会議ベルリンで開催

「民主主義と経済発展に必要な、透明性と責任のある社会を築くために」というテーマで行った。

「民主主義と経済発展に必要な、透明性と責任のある社会を築くために」というテーマで行った。



●学生、NGO関係者など350人が出席し、立ち見客も出たホテル・カンボジアーナ

「民主主義と経済発展に必要な、透明性と責任のある社会を築くために」というテーマで行った。

「民主主義と経済発展に必要な、透明性と責任のある社会を築くために」というテーマで行った。



●第1セッションの議長を務めたサム・レンシー経済・財政相。フランス留学中にMRAに出会い、国立銀行副総裁を務めるソムラ夫人と共にこれまでに数々のMRA会議に参加している

「国民和解の重要性と実現」というテーマは、イエン・モリ情報相が議長を務めた。同相はセミナーの数日前から海外参加者の

「国民和解の重要性と実現」というテーマは、イエン・モリ情報相が議長を務めた。同相はセミナーの数日前から海外参加者の

「国民和解の重要性と実現」というテーマは、イエン・モリ情報相が議長を務めた。同相はセミナーの数日前から海外参加者の

「国民和解の重要性と実現」というテーマは、イエン・モリ情報相が議長を務めた。同相はセミナーの数日前から海外参加者の

入会のご案内

(1) 正会員 個人 年額 6,000円

法人 年額 50,000円

(2) 賛助会員 個人 年額 3,000円以上

法人 年額 50,000円以上

郵便振替口座 東京八一三八二八九

口座名 社団法人 国際MRA日本協会

● 問題解決の秘訣

● 新時代に必要な情報

● 世界家族の仲間入り

● 信頼できる人との出会い

● 心身の健康

● 事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50,000円(寄付扱い・年額)を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号

口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

東京五一四一三六六五

協会特別協力年会費

インタビュを国営テレビで何度も放映した他、MRAを通して戦後の独仏の和解に貢献したイレーム・ロー夫人の生涯を描いたビデオ(クメール語)の三度目の放映もなされた。十年前にカナダのMRA関係者からの手紙がきっかけでインドシア難民を助ける会(現・難民を助ける会)を作った八十歳を超える相馬雪香さんが、ご主人を亡くした最初の海外訪問にカンボジアを選んだことは、他の参加者に大きな感動を与えた。「ポルト派の心を変えることは可能ですか?」というフロアーからの質問に対し、「それは可能です。それには先ず自分の心を変えることです」と力強く応えた。英国下院外務副委員長ジム・レスター議員は、政府の政策に反して長年ブノンペン政権と交流してきたが、「労働党議員の父と保守党の自分は考えを異にしていて、議会ではお互いを尊敬して政治を行なった」と、政党政治の重要性を強調した。今回は、ジョージ・メスマー議員(仏)、フィリップ・ラドック議員(豪)も参加したが、いずれも長年カ

ンボジアにわってきた良心派の外交官、利権や内政の都合で外交に手を出す一方、肝心の時には「国会重視」の建前で釘付けになってしまふ日本の政治家とは、質も動機も違うことが歴然と感じられた。十年前に小田原のMRA会議に出席したヘン・モニ・チェンダ師は、「殺すな、盗むな、嘘つくな」といった仏教の教えは、元々戦乱後の和平形成時に生まれたことを紹介し、仏教に基づく国民和解を訴えた。バタンバンの寺院で寺小屋や社会事業を行なっている同師は、十二才で初めて幼稚園に入れた少女がやつと笑顔を取り戻したと、教育再建の重要性を訴えた。

自らの弱点を変革の原動力として活かす

「紛争が続く世界に対するカンボジアの貢献」というテーマで行われた第三セッションは、ウン・フット教育相が議長を務めた。同相は「地獄を見たカンボジア人のメンタリティーを変えられることが必要だ。自らの弱点を認識して、それを変革の原動力

として活かしていくべし」と述べた。他の紛争地域に役立つカンボジアの資質は何かという問いに対し、私は以下のことを挙げた。(1)第二次大戦中タイと共謀してカンボジア西部三州をタイに割譲させた日本に対し、賠償請求権を放棄した寛大さと許し。(2)十年前難民キャンプで会った僧侶が「わが国が失った最も大きな損失は、国土でも、人命でもなく、何が正しく何が間違っているかという善悪の判断を失ったことです。これを建て直すために手を貸して欲しい」と訴えたことに象徴されるように、苦しみの中から本質を見極める力。(3)最近カンボジア代表を迎えた経団連幹部が「唯一の資源である人的資源が汚職で汚染されている我が国に比べ、お国におかれては既に汚職などに大胆な対応を始めておられる」と評価した抜本的改革への取り組み。そして、今世紀最大級の悲劇を経験したカンボジア国民が、ひた向きに生きている姿が私自身も含めて世界中の人々の生き方を変えてくれたことにお礼を申し上げます。

御礼

今回のセミナー開催のために、ご寄付をお寄せいただいた多くの方々にこの誌面をお借りして心よりお礼を申し上げます。この他にも会場となったホテルが趣旨に賛同して昨年同様会場費を無料にしてくれたり、カンボジア外務省やNGOが送迎や無料奉仕のボランティアの派遣などの支援を行なって下さいました。このような国際的なチームワークなくして今回のセミナーの開催は実現し得なかったと思われます。有り難うございました。



●第2セッションのパネリスト。(右から)ジム・レスター議員(英)、アラン・テート(仏)、イエン・モリ情報相(カンボジア)、相馬雪香、チフ・クス(元UNTAAC通訳)、エド・エスピリト(比)

自らの経験を率直に語る 指導者たち

「思想の力・誰が正しいかではなく、何が正しいか」というテーマで行われた第四セッションはチエン・バン国会財政金融委員長（前出）が議長を務めた。ソン・スーベール国会副議長（ソン・サン氏次男）は「国民に仕えるのが議員の役割。人を責めるよりも先ず自ら変わることに」として、兄貴風を吹かしていた弟に謝り家族の和解から始めている経験を述べた。こうした指導者の率直な発言のハイライトが、ソー・ケン副首相兼内務大臣の開会式における講演であった。（堀本崇氏のレポート9ページ参照）

党派の異なる指導者が、次々と自らの体験や改革への真剣な努力を語るのを、将来この国を背負うであろうこの国唯一の大学プノンペン大学の学生多数が聞き入り、直接質問を投げかける光景は、日本の現状と比較しても羨ましく感じられた。ソル・ケン副首相など一部を除いてこれまで触れた指導者は皆、留学

生、難民、亡命者、修行僧であった時期にMRAに出会った。長年これらの人々の就職、進学、住宅の問題から、家庭や結婚生活に至るまで親身に相談に乗ってきた各国MRAのボランティアが、セミナーの準備や裏方を担っている姿には、ただただ頭の下がる思いだった。

カンボジアの自力復興に求められる息の長い手助け

参加したカンボジア人の中から、カンボジア青年協会代表が七月にマレーシアで開かれるMRAアジア太平洋青年キャンプに参加する他、女性団体インドラ・グループ代表がスイス、コートの世界大会参加を検討している。かつて、敗戦で打ちひしがれた日本人々が、MRAを含む内外のあらゆる機会を利用して国造りの理念やモラルを謙虚に学び、多くの国々の助けで立ち上がることが出来た。カンボジアもPKOや復興特需といった一過性の助けではなく、自力復興に対する息の長い手助けを最も必要としている。

（藤田幸久）

第二回カンボジア国際セミナー主な参加者

■仏教界

ユス・フット師
ヘン・モニチエンダ師

■政府

FUUFUNSHINベック党
CCPP人民党
BLDDPP仏教自由民主党
ノロドム・シリウット

■国会

ソン・ケン 副首相兼内相 (CPP)
サム・レンシー 経済・財政相 (FU)
サム・ソムラ (チューロン) 国立銀行副総裁 (FU)
ウング・フット 教育・青年・スポーツ相 (FU)
イエン・モリ 情報相 (BLDDP)
ケット・スクン 女性問題庁長官 (BLDDP)

■枢密院

ソン・サン議員 元首相 (BLDDP)

■NGO

カシー・ヌウ (カンボジア赤十字副総裁)
ダイ・ラタ (インドラ・テレビ協会代表)
オング・ブテイ (カンボジア青年協会代表)
レニー・パン (国際MRAカンボジア協会会長)

■外国

ジョージ・メスマー (国会議員、フランス)

アラシ・テート夫妻

(MRAインドシナ担当理事、フランス)

フィリップ・ラセー

(事務局長、フランス)

ジム・レスター

(国会議員、イギリス)

デビット・チャナー

(MRAプロダクション代表、イギリス)

アラン・チャナー

(農業技術師、イギリス)

フィリップ・ラドック

(国会議員、オーストラリア)

マイク・ブラウン

(MRA専従・オーストラリア)

チャールズ・トワイニング

(アメリカ大使)

ジョン・グラハム

(元外交官、アメリカ)

スピロス・ステファー

(元関税局副局長、キプロス)

チャンドラ・モハン・バンドリ

(インド大使)

チャントン・チャンタラシー夫妻

(元外務次官、ラオス)

エド・エスピリト

(教師、フィリピン)

ジュリー・タン

(MRA専従、マレーシア)

相馬雪香

(国際MRA日本協会副会長、難民を助ける会会長)

荒井佐悉子

(早稲田大学講師、東京フオーラム代表)

大塚禮子

(日韓女性親善協会副会長)

星山日本大使館一等書記官

堀本崇

(松下政経塾生、元国連選挙監視員)

荒井千香子

(日本ユネスコ協会連盟)

藤田幸久

(国際MRA日本協会専務理事)



●アンコールワット

ベトナム、カンボジアを訪れて

— 惜しみを越えて国造りへの情熱を燃やす人々 —

荒井千香子

日本ユネスコ連盟協会



コーで知り合った カンボジア人の女子大生

過去二年間にわたり、私は夏のスイス、コーでのMRA世界大会に参加している。そして毎年世界各地から集まってくる同年代の人たちと語り合い、友情を築いていくのがコーでの一番の楽しみである。一昨年は旧ソ連から独立したばかりのリトアニアから十日間車に乗ってコーに来た女子大生とルームメイトになり、「リトアニアの情勢、旧ソ連の圧力など彼女の生活の中

で起こっている緊迫した状況を知り、愕然としたことを今でも覚えている。去年はカンボジアから家族と共にアメリカに亡命し、現在カリフォルニアで国際関係学を学んでいる女子大生と知り合った。彼女は卒業後、カンボジアに戻ってカンボジアのために働きたいと言った。なぜカンボジアなのかという私の問いに対して彼女は、「私はカンボジア人だから祖国のために役に立ちたい。亡命以来一度も帰っていない祖国に帰りたい」と情熱的に語った。当時の私のカン

ボジアに関する知識はUNTAACの監視下で総選挙が行われたばかりの内戦の続いている国、という新聞やテレビで得た情報だけでしかなかった。

ベトナムとカンボジアを初めて訪ねる

今年三月、私はベトナム、ハノイでのユネスコ主催のアジア・太平洋地域国際NGO協議会議とカンボジア、プノンペンでのMRAカンボジア協会主催の第二回MRAカンボジア国際セミナーに出席する母に同行して二つの国を訪れた。

両国は、共に過去約三十年にわたり戦争を経験している。戦争後ベトナムは共産主義国家へ、カンボジアは王国へと全く違う道を歩んでいる。私が訪れたこの二つの国は、政治状況が全く異なるにも拘らず、共に国内産業の復興と教育水準の向上を目標に懸命に再建の道を歩んでいる。

私の目に映ったカンボジアは、日本で見聞きしていた報道とは全く印象が違い、プノンペンの町並みは美しく、緑も豊かで、



●市場の風景



●カンボジア市内の通り

が話してくれた。床にはベトナムが介入した際、クメールルージュが置き去りにしていった十四名のカンボジア人収容者の血の跡が今でも赤黒く残っている。ここに送り込まれた人たちは子供から殺され、女性、男性、外国人と生きてここを出た人は一人もいなかったという。ガイドの男性もクメールルージュに村を追われ逃げる途中、父親と兄を失った。教室の壁一面に貼られた恐怖の表情漂う収容者の顔写真と穏和な表情の看守の顔を見比べているうちに、同じ民族が殺し合う内戦の恐ろしさと不気味さを感じた。

失われたつづあるカンボジアの文化や歴史

プノンペンからアンコール時代の遺跡が点在するシエムレアップ市に向かう飛行機の窓から東洋一の大きさを誇るトンレサップ湖が眼下一面に広がる。広大な自然の中に残り残された十一世紀の遺跡を訪ねることは今回のカンボジア旅行の中で楽しみにしていたことでもあった。プノンペン市内では見られな

った内戦の跡がシエムレアップでは至るところで見られた。学校の校舎はまだ砲撃で崩れたまま、壁には銃弾の跡があり、窓にガラスはない。戦火の中をアンコールワットは八百年にわたりその優美を保っていた。しかし、インドが行なった正面左側部分の修復作業で、歴史の跡を残す黒くすんだ色調が漂白され半分白くなってしまったため、全体の調和が損ねられてしまったのは残念だった。再び黒く修復すると聞いたが、元に戻るのだろうか。

シエムレアップでは日本ユネスコ協会連盟が行なっている世界寺子屋運動の一環として寺子屋（コミュニティセンター）の建設予定地も訪ねた。日本ユネスコ協会連盟ではカンボジアユネスコ事務所と協力して、カンボジアを教育面で援助している。寺小屋の建つ村にはアンコール時代の遺跡があるが、長年放置されてきたので傷みが激しい。日本であれば国の重要文化財に指定され手厚く管理され、町興しのための格好の観光名所になるのだが、村の人たちには



●ボルボト派の拷問の様子を伝える絵

そんな考えは頭をよぎらないようであった。

カンボジアの風景から街ゆく人に目を移すと、六十年代以降の人や年輩者の数が非常に少ないことに気づいた。シエムレアップ近郊の村に行つた時も、年輩者の少なさと女性と子供の多さに驚いた。地域に代々伝わる童話、伝統工芸、民謡などを教える年輩者がいないので失われてしまったものも多いと聞いた。また長年の戦争でカンボジアの歴史も失われてしまっている。滞在中に買ったカンボジアの歴



ビデオ「MRAの歴史」

好評頒布中

頒価2,000円(送料込)

お申し込みは事務局へどうぞ

03(3821)3737

史書にも文献がないので詳しいことは不明という箇所が何箇所もある。特に古代史、アンコールワットを作ったクメール文明に関する文献が少なく、人々の生活様式もよく分からない。内戦と外国の侵略で重要な文献は失われ、加えて年輩者が少ないので歴史を語ってくれる人もいないのではないかと。私が話した人の中でカンボジアの歴史に詳しくなかったのは、カンボジアに住むカンボジア人より外国で勉強したカンボジア人だった。



●庶民の好物、蓮の実の売り子と。右はお母さんの佐奈子さん

憎しみを越えて国造りへの情熱を燃やす人々

「社会変革の鍵となる心の変革」と題した第二回MRAカンボジア国際セミナーの会場には、ブロンペン大学の学生、一般市民ら三百人以上の参加者が集まった。シリウット副首相を初め、

サム・レンシー経済・財政相、ソン・サン元首相など多くの政府要人やオレンジ色の袈裟をまとった僧侶たち、また日本から参加した相馬雪香さんのお話に参加者は心を動かされたと思う。

この会議を企画した国際MRAカンボジア協会会長のレニー・パン女史は元文部大臣夫人で、夫と兄はいまだに行方不明である。昨年の総選挙後、アメリカから帰国し、これからはカンボジアの再建、特に教育の再建に尽くすという。パン女史は歴史教育にも熱心で、教科書を作ろうとしていると聞いた。カンボジア人が祖国に誇りを持ち、古代人が築いた遺跡を大切にすることを養うのも歴史を勉強することから始まると思う。

パン女史は夫と兄を失いク

メルルージュを憎んでいたが、どんなに憎んでも二人は戻ってこないし、国も良くならない。悲しみのどん底にいる時にMRAの人と出会い、自分が立ち直るためにも先ずクメールルージュを許すことから始めたという、自分の考え方が変わった経緯を話してくれた。

私がカンボジア滞在中に出会い、話を聞くことの出来た強制収容所のガイド、二十代の学生、内戦を生き延びて働く人々、総選挙後にアメリカから帰国した人など、カンボジアの復興のた



●フロアから熱心に質問するカンボジア人参加者

めに尽くしている人に共通している点が幾つかある。それは親戚や家族がクメールルージュに殺されたり、行方不明になったにも拘らず、クメールルージュを憎む気持ちよりも、積極的に生きていくことや国の再建にかける情熱に燃えていることであつた。人を変えようとするのではなく、自分が変わることによって相手を、そして社会を変えたいという姿勢がカンボジアの人たちの心の中に自然に芽生えていることを感じた。



●マレーシアとフィリピンの参加者による国際コーラス。カンボジア語の歌に、参加者から大喝采がわいた

(終)



●元気なカンボジアの子供たち

去る三月十八日から二十日まで、カンボジアの首都プノンペンにおいてMRA (Moral Re-Armament道徳再武装運動)カンボジア協会主催による第二回MRAカンボジア国際セミナー(テーマ:社会変革の鍵となる心の変革)が開催された。今会議は、昨年三月に開かれた第一回会議の参加者からの強い要請によって開かれた。そして今や、副首相、大蔵大臣といった要職にあ

目の当たりにした一国の再建に賭ける人々の姿

る彼らは、職務多忙の各セクションの司会を務めたり、祖国に対する熱い思いを語った。私は昨年カンボジア総選挙において、UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)の選挙監視員として働いた経験があり、その縁で今回参加させていだいた。それまで私は、UNTAC選挙監視員として、カンボジアの平和創造の過程に微力ながらも関与することが出来たと、ささやかな満足感を持っていた。しかし、そんな私の感傷にも似た思いは、今回の体験で吹き飛んだのである。

それは、一国の再建に賭ける人々の姿を目の当たりにしたからである。カンボジア人のみならず、世界各国から参加した人々のカンボジア再建に対する真剣さと真摯な態度に心を打たれた。選挙監視員の経験だけで終わらず、本当に良かったと思っている。そんな人々の姿を中心に綴ってみたい。

汚職に敢然と立ち向かう勇氣ある人々

この会議の目的は、会議を通

じてカンボジアの未来創造のきっかけを作る事であったと言える。今回の特長は、そのきっかけをMRAの、社会を変えるにはまず自分から変わるという考えによって個人の中に見い出そうとしたことであった。三日間の会議では、カンボジアはもとよりマレーシア、フィリピン、米、英、仏、豪、キプロス、日本から集まったMRAの関係者が、自らを変えた体験や思想を基に、カンボジアの未来を語った。

英、仏、豪からは国会議員も

カンボジアを再び訪れて

=政治家たちの心には
カンボジア国民が存在していた=



元UNTAC選挙監視員

堀本 崇

(ほりもと・たかし) 1967年生 27歳。明治大学政治経済学部政治学科卒業後、財団法人松下政経塾に第13期生として入塾。平和問題をテーマに、カルカッタにあるマザー・テレサの施設「死を待つ人の家」でのボランティア活動などを行なう。また、平成5年には、UNTACの選挙監視員として、カンボジアPKOに参加する。平成6年3月には第2回MRAカンボジア国際セミナーに参加。同5月、カンボジアを再度訪れた。その他、フランス、スリランカ、タイ、中国など9ヶ国で研修を行なう。



●開会式で基調講演するシリウット副首相兼外相。同相は政府を代表して外国人参加者歓迎夕食会のホストも務めた



●閉会式で総括の講演を行なうソー・ケン副首相兼内相。チェア・シム国会議長の義弟にあたる

自費で参加していた。そして、カンボジア人を除く参加者全員が同じホテルに宿泊したのである。決していいホテルではない。私は毎晩、三匹のヤモリを天井に眺めつつ夜を過ごした。しかし、彼らはそんな事は一切気に止めず、全スケジュールをこなしたのである。私は、そんな彼らの姿に敬意を払わずにはいられなかった。

日本からは相馬雪香（尾崎行雄記念財団副会長）、荒井佐念子（東京フォーラム代表）、大塚禮子（日韓女性親善協会副会

長）、佐伯憲（ウイル・エンターテイメント社長）、荒井千香子（日本ユネスコ協会連盟勤務）の各氏と私の六名と、コーディネーターとして国際MRA日本協会藤田専務理事が参加した。私自身、ブノンペンに初めての訪問であった。或る日、カシム・ヌウ夫妻（カンボジア人権協会会長、セミナーにも参加）が市内観光に行くというので車に同乗させていただいたのだが、ベントツ車の多さには驚かされた。街の様子から、ベントツに乗れるほど裕福な人がこれほどいるとは想像がつかなかった。その背景を尋ねてみた。「汚職ですよ。私たちの国がこれから新しい第一歩を踏み出そうとしているのに、自らが富むことしか考えていない。悲しい事です。私には車を持つ余裕はありません。この車もレンタカーです」と彼は答えた。現在大蔵大臣を務めるサム・レンシー氏と共に汚職に敢然と立ち向かう、勇気ある人間の一人である。彼はそのため、幾度となく命を狙われてきた。現在のカンボジアには汚職を取り締まる法律はない。彼

Healing history • Transforming relationships • Building community

FOR CHANGE

Volume 7 Number 3 June/July 1994

- Northern Ireland: hands across the divide
- Coping with cancer
- Bunny Austin: controversial tennis star

HESSISCHE WALDSTADION HESSISCHE

Akabusi's hurdles

MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

FOR CHANGE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

世界中で起こっている変革(チェンジ)とそれを担う人たちのイニシアチブを!

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌(英文年間6回発行)定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、購読料(1年分=¥4,500 ※郵送料込み)を郵便振替(口座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込を代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウス ミタケビル102
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

らが汚職に手を染めようと思えば、容易な事であろう。しかし、ペンツを横目にしようとも、命を狙われようとも、彼らの意志は揺るがないのである。ドライプの途中でヌウ氏が買ってくれた庶民の好物である蓮の実は、清々しい味がした。

政治家たちの心にはカンボジア国民が存在していた

さて会議であるが、先ず会議の開催を飾ったオム・ラザディ氏の発言を紹介したい。彼の真剣さが会場を包んだ。

「選挙が終わった今、平和、人権等が非常に重要になってくる。過去二十年間を振り返るのではなく、未来に向かっていくことが重要である。UNTAACが去り、カンボジアには大きな穴が開いた。カンボジア人自身が独自のモラル、文化を呼び起こし自ら平和を構築していかなければならぬ。国民全員が平和の創造者となる必要がある。なぜなら、我が国の再建には指導者相互、国民相互の理解が欠かせないからだ。そして、政府や議会は正しい理念を打ち出さねば

ならない。の機会はカンボジアにとって、平和を創り出す最後の機会である」。

今回の会議で刮目すべきことは、閣僚であろうが聴衆の学生であろうが、あらゆる参加者がカンボジアの未来に思いを致す一人の人間として地位など全く関係なく平等に参加していたということであった。

次に紹介したいのは、その好例である。全スケジュールの最後を締め括ったソー・ケン副首相（兼内務大臣）の発言は圧巻であった。彼はC P P（カンボジア人民党、前政権党）のメンバーであり、UNTAAC総選挙では警察権力を使って行われた選挙干渉の総元締めであった。いわば、第二次世界大戦時の「特高の親分」といったところであろうか。その彼の発言である。「以前ポルポト派から逃げた時、二つの暗殺者集団が私を追ってきた。私はベトナムに逃げ延びて難を逃れたが、妻子を伴うことができなかつた。その後祖国に戻ってみると、妻だけでなく生後七日の子供まで殺されていた。私は怒り狂い復讐を考えた。

CREATORS OF TRUST AND PEACE

CAUX

1994

スイス、コーMRA世界大会のご案内

総合テーマ

「信頼と平和の創造者へ」

■期間：1994年7月8日(金)～8月28日(日)

プログラム

7月8日(金)～18日(月)

全世代間ダイアローグ

「過去、現在、そして未来＝責任を分かち合う」

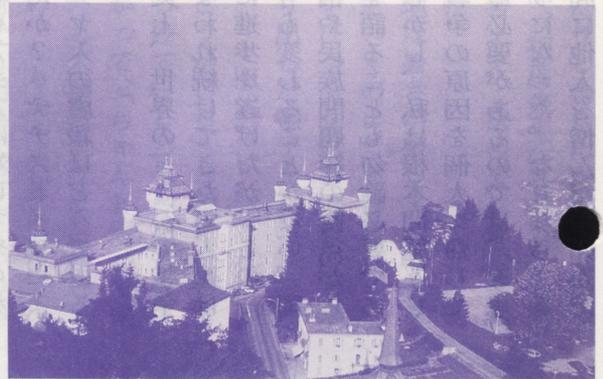
7月20日(水)～24日(日)

産業人会議「経済と個人－失業の挑戦に答える」

7月24日(日)～27日(水)

コー円卓会議

「収益性と企業の地獄的責任は両立するか、それとも相反するか？」



7月26日(火)～31日(日)

ヨーロッパ会議

「困難に瀕する大陸ヨーロッパ－多様性の中の調和」

8月4日(木)～12日(金)

女性提唱会議「平和の創造者－ビジョンから行動へ」

8月15日(月)～25日(木)

紛争地域会議

「危機に直面する地域、危機を脱しつつある地域－互いの経験に学ぶ」

最近になって、私を追った暗殺者たちのうち五人がまだ生きていることが分かったが、私は彼らに復讐はしないと伝えた。商売を始めたいという男には資金援助さえ与えた。暴力や復讐はさらなる暴力しか生まれない。この悪環境は止めねばならない。ポルポト派の問題についても、MRAの四つの基準で解決できるのではと考える。

カンボジアの再建に賭る政治家たちの姿が忘れられない。わが日本は、たった一つの点を除いてカンボジアに優っていると思われる。その一点とは国の運営に関わる人々の真剣さである。カンボジアの行く手には幾多の困難が待ち受けているであろう。しかし、彼らはきつと乗り越えていくだろう。なぜなら、彼ら政治家たちの心にはカンボジア国民が存在しているからである。以前、松下政経塾の仲間と共に相馬氏（前出）の講話を拝聴したことがある。今回の会議が終わって、その時間いた言葉を思い出した。

「あなた方は政治家を目指して

いるんでしょ。でも、そういう方に限って、自分が政治家になれば社会が変わる、と思っていられちゃうのね。本当に社会を変えようと思うのなら、まず自分が変わることですよ。政治家であろうとなかろうと、自分が変われば家庭や友人関係が変わってくるんです。そうすれば、地域社会が変わり、国が変わるんです」。

理想とは求め続けるもの

今回の会議では、連日ブノンペン大学の学生やNGO関係者など三百人が会場を埋め尽くした。彼らは、自分を変えるきっかけを掴んだと信じる。それぞれの心に「希望」という灯がともるきっかけを。

最後に、ポルポト派による虐殺で有名なトゥル・スレン政治犯収容所を見学して考えさせられたことを書いて体験記を終わりたい。政治犯というのは、勿論ポルポト派から見た呼び名である。

そこには数千に及ぼんとする囚人たちの真（処刑直前に撮

影された）、虐殺の様子を描いた絵、拷問に使った道具などが展示されていた。犠牲者たちの顔は拷問で腫れ上がり、目には一切の力がなかった。一体どんな気持ちでレンズを見つめていたのだろうか、と思った。拷問道具を見て、よくもこんな道具を考えつくと思った。そして、虐殺の様子を描いた絵を見た時、私はもはや虐殺に係わった連中を人間と思えなかった。

この虐殺がポルポト派のみのことであれば、彼らを問題にすればいいであろう。しかし、我が日本もアジアに対してやらなかったか？ ナチスドイツによるユダヤ人の虐殺はどうであろう？

有史上、世界のどこかで戦争は行なわれ続けてきた。人類は確かに進歩を遂げたが、この一点は今も変わることがない。国際政治や民族問題等の観点から戦争を語ることも勿論必要である。しかし、私は根本問題として、戦争の原因を個人に帰して考える必要があるのでは、と思うようになった。なぜなら、もし人間に他人を憎んだ如んだ

りする心があるとすれば、特殊状況下に於いてあるバイアスがかかった時、誰もが残酷性を持ち得ることを否定できない、と思うからである。

「あなたは戦争を否定しますか？」と人に聞けば、誰もが「いいえ」と答えるであろう。そこで、「しかし、国としての軍備は必要でしょう」と、付け加える人もいると思う。私自身、その論を全否定することはできない。

しかし私たちは、そうした考えに余りに慣れていないだろうか？

理想は、総じて迂遠なものである。しかし、追い続けるからこそ近づける。求め続けるからこそ、理想である。それを「理想に過ぎないね、甘いよ！」と言った時、それは夢想になる。今回のカンボジア訪問を終え、様々なことを考えずにはいられなかった。私たちの言う（平和）と、彼らカンボジア人の言う（平和）とは重さも違えば、求め方も違うことを痛感せずにはいられなかった。スローガン好きな日本人の一人として。

（終）

何が何でも相馬先生にくつついていく！

私の頭の中のどこかに、「相馬雪香先生（日韓女性親善協会会長）がカンボジアに行かれる」という言葉が残っていました。前々から、主人の用事や観光では、ヨーロッパやアメリカなどにはたびたび出掛けている私ですが、テレビ、新聞等でカンボジアのことが色々報道される中で、一度は自分の目で見てみたいという思いが潜在していたのでしょうか、パスポートも切れ



●相馬雪香さん（左）と

カンボジアを訪れて

日韓女性親善協会副会長

大塚禮子



ていて、短時間で交付してもらえないかどうか分からないままに、出掛けることを決めたのです。

何しろ旅といっても、誰もが出掛けていく所でもなく、旅案内がある訳でもなしに、ともかく手探りのような気持ちで準備を始めました。

お友達に話すと、「あれ、PKOとか何とかいって、とても危ないんじゃない」と冷やかされたり、「言葉通じなくて大丈夫？」などと言われて、一体カンボジアは何語だろうかと真剣に考え

込んだりしましたが、もかく「全部、相馬先生任せだわ」と勝手に考えて、決めてしまった私でした。

現地は暑さが厳しく、「帽子を持っていくのよ」と言われて、納屋をひっくり返して奥の方から取り出した帽子をかぶって、「チョット旧式だけど、これ持っていこうかしら」と鏡に映して格好つけているところを主人に見つかって、「ちゃんと帰って来いよ」と人事のように言われて大笑い。ともかく決意した以上、何が何でも相馬先生にくつついていけばいいんだという気持ちでした。

芯の強い深い情熱を秘めたカンボジアの女性たち

タイのバンコック経由で入ったカンボジア、プノンペン空港は、とても静かで、美しい花壇が蒸し暑さを忘れさせてくれるようでした。税関に入ったとたんに聞こえる耳慣れぬ言葉に、「ああ、カンボジアなんだ」という実感が沸いてきました。走る車窓から見える町並みをどう表現したらよいの



●バイクの多いカンボジア市内の通り



●ソン・サン元首相夫妻（筆者の左）と



●カンボジアの結婚式



●コーヒーブレイクの手作りのお菓子や果物、会場の生花、装飾は女性NGO
インドラ・グループが受け持った

でしょうか。以前、北京に行つた時、どこからともなく集まつてくる自転車の波に圧倒されそうになったことを思い出しました。もちろんカンボジアにも自転車を走らせる人たちもいるものの、それ以上に、オートバイに三人も四人も乗せて走らせていたり、又、人力車も……。その光景は異様に思えました。お白粉気や紅のない女の顔、日本人より少し浅黒く凸凹をつけたような顔、笑顔をどこかに置き忘れてきたような顔、でも、目だけはキラキラと光っていて、

そこには一生懸命生きていこうとする民族の底力のようなものが伝わってくるようでした。その昔、フランスの植民地であった面影が少しは残っているものの、荒廃した町並み、歩道と車道の区別のないメインストリート、国民の台所を預かるマーケットは雑然として、走る車の砂埃を一杯に受けていました。この国は一体どうなっているのだろうか。どうなっているのだろうか。なくてはならないのだろうか。本当に真剣に考えていかなければと、他人事では済まされないと

思いました。

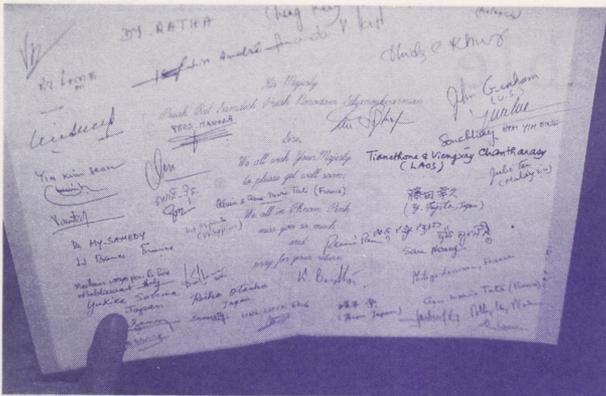
一方、絹の織物の美しさには、目を見張るほどの文化、そして歴史と伝統を見い出すことが出来ました。この国の人口の六十五％が女性であると聞きました。手で一本一本織り上げた布で作った民族衣裳、少々控えめに見えるこの国の女性でしたが、何か芯の強い深い情熱を感じました。

感謝の心が欠けた日本人の生活を恥じる

ポルポト派の元処刑場だった学校の教室の一室一室での、老若男女を問わず拷問や処刑を強いられた壮絶な光景と無残な姿を残した様子はとても正視出来るようなものではありませんでしたし、今でも思い出すと、カンボジアの悲しさ、痛ましさを痛感するのです。あの一九七五年からの四年間の空白は、これから何年経ったら癒えるのでしょうか……。会議の中で、何人かの方が肉親の悲劇の話をされていますが、その苦しみを越え、許し、前進するエネルギーに大きな拍手を送りたい気持ちで一

杯でした。そしてこの二日間の会議を通じて、会場のホテルに集まった学生、社会人、婦人のそれぞれの方々が、国造りにも、それこそ一緒になって、同じ立場で話し合う様子はとても日本では見られない光景でした。昨年、各国から派遣された選挙監視員の努力の下で国造りの第一歩が踏み出されましたが、何事も最初が肝心、前進するカンボジアに大いに期待を寄せています。

相馬先生と共に過ごしたホテルは、シャンゼリゼという二流のホテルと聞きましたが、天井は高く、窓はカーテンで覆われ、部屋の中は寒いほど冷房が効いて、異常な暑さに備えているものの、お風呂がないばかりかシャワーから出る水はメコン川の色づいた水。口をすすぐ水はミネラルウォーター。時折、停電してローソク片手に洗面所に行ったことなど……。今になれば、どれもこれも良い思い出ですが、余りにも豊かで、何の心配もない日本人の生活に感謝のないことに、恥ずかしさを感じる光景でもありました。



●北京で療養中のシアヌーク国王に宛てた平和の願いを込めた参加者の寄せ書き

また、近くで結婚式が行われていたのでしょうか、朝から夜まで、一日中お経と、東北の民謡のような音色の音楽が交差するように奏でられ、祝いごとにしては珍しい音色で、異様な雰囲気でした。しかし、さすがにフランスパンは美味しく、エスニック料理の好きな私ですので、とても美味しくいただきました。この国の民族の深い歴史と、内蔵されたこの民族の底力、そして逞しさが、必ず遠くない未来の発展を約束していると思うのです。

大きい力は小さい力を大事にしてこそ価値がある

私は十七年前、隣の韓国に参りましたが、それ以来毎年訪ねる韓国の発展振りを見て参りました。恐らく何年かしてカンボジアをまた訪れる時には、飛躍的発展を遂げていることだろうと思います。その活力の源泉は、何といても「平和」そのものであり、同時に豊かな先進国の援助は欠かせない義務のような気がします。そしてその援助は、物に比重がかかるものではなく、心に大きな力が及ぶよう、その上での経済援助でなければと思います。言い換えれば、大きな力を持つ者は、とかく自意識過剰になりがちだということです。大きい力は、小さい力を大事にしてこそ価値があるのだということが、今回の貴重なカンボジアへの旅の大きな収穫でした。相馬先生初め関係者のお力添えにひたすら感謝の今日このごろです。有難うございました。

(終)

▷▷▷ 第18回MRA国際キャンペーンのご案内 ◁◁◁

昨年のMRA小田原国際会議より



今回のキャンペーンでは、アジア、そして世界の人々と共に生き、幸せを分かちあうために、今、私たち一人ひとりに何ができるか、また、世界の人々から信頼を受けられるような道義国家になるために、日本がどう変わるべきかを探り、具体的な行動につながる糸口を探りたいと思います。お問い合わせはMRA事務局へ。

総合テーマ
＝道義国家を目指して＝

共に生き、幸せを分かちあうために

□期間：1994年10月8日(土)～10月17日(月)

□場所：小田原、東京、浦和、神戸 他

暫定スケジュール

10月8日(土)～10日(月)
MRA小田原国際会議
(小田原国際シンポジウム 10月9日)

12日(水) 東京国際シンポジウム

13日(木) 浦和プログラム

15日(土)～16日(日)
関西秋季大会

17日(月) 東京プログラム

CAUX Round Table

コー円卓会議 (CRT) 中間会議

ベルリンで開催される

テーマ

革新(イノベーション)と東西協力による雇用創出

- 革新(イノベーション)と柔軟性の向上による雇用創出
- 東西協力の拡大による雇用創出
- 教育の向上と適正な教育による雇用創出

○日時 一九九四年二月二日(水)～五日(土)
○会場 東西経済アカデミー(OWWA)



・・・コー円卓会議 (CRT)・・・

貿易摩擦の激化と海外での日本のイメージの悪化を懸念したフレデリック・フィリップス氏(オランダ)とオリビエ・ジスカールデスタン氏(フランス)が提唱し、86年8月の第1回会議以来、夏はスイス、コーのマウンテンハウスで、中間会議は世界各地で開催されています。

一、失業から戦争に至ったという歴史に学ぶ

コー円卓会議ベルリン中間会議は二月二日から五日の間に開催された。「成長と雇用」をテーマにした昨年の第八回円卓会議(スイス・コー)において、「国民全員に仕事を与える!と豪語してヒットラーが権力を掌握してしまったように、失業が政治問題化して戦争に至ったという歴史の教訓を忘れてはならない。歴史の大転換の中で失業問題に取り組むドイツを訪問しよう」というCRTの創始者フレデリック・フィリップス氏(フィリップス社元会長)の呼びかけで実現したものである。OECD諸国全体の失業者は三千五百万人、ドイツだけでも四百万人に達する。壁を打ち破り東欧民主化の先駆け役を果たしたベルリンは、多くの失業者を抱えながら大変革に挑んでいる旧東欧の玄関口である。

円卓会議の前に、日米欧のメンバーはドイツ信託公社を訪ね、ヒロー・ブラームス副總裁の話をうかがった。同公社はベルリンの壁が崩壊した五ヶ月後の

九〇年三月に、国営企業の民営化を進める為に東ドイツ政府によって設立されたものである。旧国営企業の総合的分析・評価をした上で、(数少ない)存続可能な分野はリストラや新技術の教育、設備改良等を行った上で、民営企業に移行。残りの殆どは、不良部門や将来性の無い部門を切り捨て再教育を施し、地方政府とも協力して税制優遇その他の投資インセンティブを付けた上で、西ドイツを初めとする外資系企業の「婿探し」を行なう。敢えて日本に置き換えれば、旧国鉄清算事業団というよりも、明治維新の廃藩置県、農地改革、殖産興業などを一手に司る実行部隊といった趣である。「東ドイツという世界最大の倒産会社を扱う世界最大の持ち株会社」と言われ、旧東ドイツ国民大多数の生殺与奪権を持ったこの公社の初代總裁は暗殺されている。この壮大な実験の過程に於て、九二年には生産が統合前の四分の一に、雇用も九百万人から四百万人へと激減した。失業も1.1

%から15%に上昇した。しかし、二千七百五十億マルクに及ぶ負債を肩代わりしてのこの巨大リストラムも軌道に乗り、初めは難航した。婿探しも最近は順調に進んでいる。暗殺された初代総裁と西ドイツ企業で同僚であったというブラームス副総裁からは、二度とない改革の好機を決して逃してはならないという使命感が感じられた。

ポツダム宣言が行われたセシリエンホフ宮殿のレストランで行われた夕食会にはブランデンブルク州シュトルペ首相が出席



●歓迎夕食会で挨拶するシェーリング社ホルスト・クランプ取締役(ベルリン商工会議所会頭)

した。旧ドイツ五州の首相のうち唯一旧東ドイツ出身である同首相は、「閉鎖された三分の二の企業に代わり九千の新企業が設立され、新たな中産階級が生まれている」とした上で、「我々がとった道は90%の州民が賛成し、75%が生活が良くなったと感じ、西ドイツよりも多くの人々が将来を楽観的に見ている」ことを紹介した。

二、旧東独の債務より旧西独の硬化症が大問題

実際最近のドイツ政府による経済改革に関する幾つかの報告は、東ドイツという不良会社を吸収したコストが問題なのではなく、寧ろ西ドイツの長年の硬化症(高い賃金や社会保障費、政府規制、労働時間や仕事の内容に関する固定化した労使協約、起業家精神の欠如、等)が足枷になっており、西ドイツ自体の改革こそが急務であると指摘している。元々技術レベルの高い東ドイツ国民が、生き残りをかけて真剣に働き、しかも新しい時代に合った新しいシステ

ムで産業立地を進めている東ドイツのほうに有望だとして、こちらに生産移転を行った西ドイツ企業も少なくない。CRTのドイツ人メンバーも「東部の統一のヤマは越した。後は、我々西部が自己改革を成し遂げられるかどうか、にかかっている」と締めくくった。

世界銀行の役員の職を辞して、トランスペアレンシー・インターナショナルという国際ビジネスの汚職行為に対応するネットワークと行動基準作りを始めたピーター・アイゲン氏との意見交換も有意義であった。

三、必要な、資本主義自体の改革と企業のイノベーション

「革新(イノベーション)と東西協力による雇用創出」というメインテーマで開かれた円卓会議は、東西経済アカデミー(OWWA)で行われた。これは、四年前に多くのドイツ主要企業の支援で設立され、これまでに旧東欧の数千人の指導者に市場経済やマネジメントの基本に関する教育を行ってきた。講師陣



●ポツダム宣言が行われたセシリエンホフ宮殿で挨拶するブランデンブルク州シュトルペ首相(右)

も六十の企業や銀行の役員である。元国連科学技術局長のシュタンドケOWWA会長は、「統一とは、東に匹敵するような変革を西も成し遂げることにある」とした上で、「東欧、特にロシアは、西欧に必要な全てのエネルギーや、多くの原料を供給できる潜在力を秘めている。この失業している産業を近代化することが果てしない課題だ」と述べた。「失業と雇用創出の課題」というテーマの第一セッションでは、各国別の状況が報告された。英、

米、独、仏など10%を越える深刻な失業状況が報告されるとともに、競争力と雇用との相関関係、リストラと雇用との相関関係なども指摘された。また、小規模企業や自営業で新しい雇用が創出されていることが英米から報告された。一方フランスからは社会道徳の衰退が経済の停滞につながっているとの意見もだされた。ポーランドでは16%という高い失業率の62%が34歳未満の若者であるという実情が報告され、これに対応する教育制度改革の必要が挙げられた。

松下電器の金子副理事は不景気
の状況と日本的雇用慣行を説明
した上で「企業内失業」を加え
ると日本の失業率も5ないし6
%に達すると述べた。そして、
レイオフによる不況対策や利益
計上という手段を取らない日本
企業は、中途採用の併用、能力
給の導入、時短など様々な方法
で対応しているとした上で、七
七年の不況時に松下幸之助氏が
「不況は人の心が作るもの」と述
べたことを紹介した。
「もつと雇用を創出するために
民間セクターに何ができるか？

新しい起業家の役割とは何か？
企業責任はどの程度が実効的
か？ 政府の政策がどのよう
に変わると役立つか？ 資金を何
処から捻出するか？」というテ
ーマの第二セッションで基調講
演を行なったキャノンの賀来会
長は次のように述べた。

「西側における失業増大の主要
原因には、(一)貿易インバラン
ス(黒字国より赤字国への失業の
輸出) (二)難民の発生及び流入
(三)資本主義体制のひずみを挙げ
ることができ、この中で(三)が最
も基本的要因である。資本主義
体制側は社会主義側より、社会
保障制度の良い面を取り入れ、
資本主義そのものを永続するよ
うにしてきた。しかし、いまや
高い社会コストを賄う各国政府
の能力も限界に達している。資
本主義自体も修正を迫られてい
る。こうした失業問題を解決す
るには、(一)に対しては、黒字国、
赤字国とも貿易インバランス解
消に努力する。(二)に対しては、
難民を出している国の生活水準
を上げ、かつ自助努力を高める
前向きな援助を行う。(三)につい
ては、「得」ことに狂奔」するよ

CRTベルリン中間会議参加者

一九九四年二月二日(水)～五日(土)

(CRTメンバー)

■ヨーロッパ

フリードリッヒ・パウアー博士

MST社社長 シーメンス元取締役

ラインハルド・フィッツシャー

フリードリッヒ・シヨック

フリードリッヒ・シヨック

(イギリス)

ネビル・クーパー夫妻

トットマナーシフトパートナーシップ会長

ジョン・コックス

化学産業協会専務理事

ジョン・ストラングフェルド

フリコア・キャピタルグループ会長

(フランス)

ジョン・ル・デルス

金融コンサルタント、元世界銀行役員

オリビエ・ジスカールデスタン

ヨーロッパ経営大学院副理事長

■アメリカ

チャールズ・デニー

ADCテレコミュニケーション会長

ウォルター・ホドリー博士

フリー研究所シニアフェロー、パンクオ

フアメリカ元副頭取兼チーフエコノミスト

ジェイムズ・ハウエル夫妻

スタンフォード大学教授

ガーネット・キース

アルテンシャル保険副会長

ロバート・マクレンガー

ミネソタ企業責任センター所長

ジェイムズ・モンゴメリー

パンナム・ワールドサービス元会長

ロジャー・パーキンソン

■日本

賀来 龍三郎

金子 保久

キャノン会長

松下電器産業海外部門東京担当副理事

(ドイツ、旧東欧側参加者)

テイログラーフ・フロッグドルフ博士

ベルリン日独センター事務総長

ホルスト・ハニカ

ABB社ベルリン、新連邦州地区担当取締役

ヴェルナー・ハウエンヘルム博士

ベルフンドネット・ガス技術取締役

ホルスト・ハーレマン博士

ルフトハンザ航空東方担当支配人

ルッツ・ホフマン博士

ドイツ経済研究所所長

デトレフ・クネヒテル

モアルネ・パウエレメンテ・クネヒテル顧問会議議長

クルト・フリードリッヒ・ラテンドルフ博士

ドイツ・バゴンパフ取締役

アルブレヒト・グラウ・マトウシユカ伯爵

マトウシユカ・グループ代表

ヘドヴィ・ルドルフ女史(博士)

社会科学研究所センター所長

クラウス・ハインリッヒ・シュタンドケ博士

OWWA会長、元国連科学技術局長

クラウス・トユルツク

カルテンバッハ&アオイクト社国際関係部長

(ポーランド)

ポータン・グルツクマン

ボズナン経済大学学長

(チェコ)

ヴァクラフ・ジュネク

ケマル社社長兼社長

うな人の意識を変えることが先決だ。このような事態の下、失業を解決する上で企業は何を為すべきか？ それには先ず今体力が弱まっている企業自身が革新（イノベーション）に務めて地力を高め、過当競争や過少競争を排除し、真に独立した企業として富を創造し、各ステークホルダーに公正に分配するという本分を果たすことだ。米国企業のようにレイオフをすることでリストラを行なうのではなく、日本企業のように企業内失業者をできる限り温存しながらリストラに励むことは社会にとつては効率の悪いことではあるが、社会的には大きな意義がある。雇用の維持、拡大は企業の大きな社会的責任である」

このセクションで明らかにされたポイントは以下の通りである。

- ・テクノロジーは、生産に適用された時には職を減らす、市場開拓に使われた時には職を増やす。新しい、良い、安い製品を創出するのがテクノロジーの役割
- ・コストを吸収できる新しい製

品の開拓（雇用をもたらす。イノベーションによる新市場の開拓がビジネスの役割

・雇用は景気環境と関連しており、耐久消費財からサービス産業への移行など産業構造の転換が必要

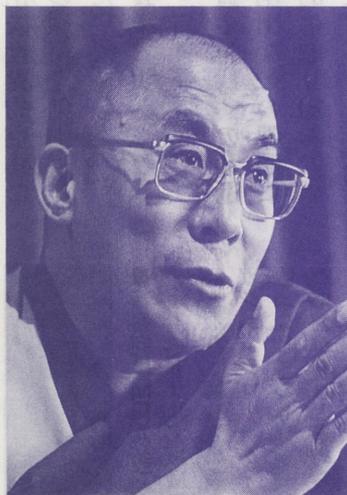
・賃下げは最悪の道。賃金はコスト要因であると共に需要要因。個人収入が減れば個人消費も減る

四、ハイテク・低賃金時代の創造的雇用創出

「将来のハイテク世界のニーズに応じて、労働者にやる気をおこさせ、訓練を与え適応させるにはどのようにしたらいいか？ 投資と生産性の増大は雇用増大と両立するか？」というテーマで行われた第三セクションでは、先ず政府を初めとする公的機関の効率アップの必要性が説かれた。そして、ビジネスは経営やシステム開発の教育に力を注ぐと共に、職場のコミュニケーションや地域との調和の技術も提供していく使命があることが強調された。ポーランドの職能訓練プロジェクトでは、個々の専

◇MRA関係ビデオのご案内

ダライ・ラマ14世からのメッセージ



愛と心の平和

編集・発売 アジア・フォーラム
企画・制作 (社)国際MRA日本協会

好評発売中！

VHS(20分)4,500円 日本語吹き替え

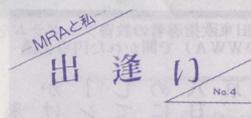
MRA体験記

出逢い

NO.4

好評頒布中！

— 47ページ頒価450円 —



お申し込みはMRA事務局へどうぞ
バックナンバーもごぞいます

門技術を修得する前に先ず経営とマーケティングを学ぶことが紹介されたほか、フランスでは、給与の2%を訓練に充てれば免税措置を受けられることが紹介された。また、テクノロジーの変化と同僚に人間関係の変化にも急速な変化が起きており、新しい政策はトップダウンではなくボトムアップで行なうなど、新しい対応の必要も指摘された。

「西側の産業システムは雇用創出のニーズにどこまで対応できるか? 将来に危険は無いのか? 経営原則はどうやって違いをもたらしことができるのか?」斬新なアイデアと多国間協力の必要性」というテーマで行われた第四セッションでは、先ず賃金に対する社会コストの高さ(ドイツ90%、スイス32%、イタリア120%)が競争力を弱めていることが指摘された。又失業問題は、単に失業者ばかりでなく、職に就く機会がまだ一度も与えられたことがない若者、早期年金生活者など働く意志があっても働けない多くの層を含んでおり、これは人の尊厳を奪っていることにほかならない。社

会から排除された働かざる人にも多くのコストを支払うよりも、人に意味ある仕事を与えて社会を共に担ってもらおうほうが建設的対応である。

政府規制の緩和、ビジネスに対する国の介入の抑制、民営化の促進などに力が注がれるべきで、かつては寡占的恐竜と呼ばれたブリティッシュ・テレコム



●田東独自の科学技術や技能のレベルの高さを説明するベルリン上院産業技術担当ノールベルト・マイスナー議員(ベルリン市庁舎にて)

(BT)が民営化後世界的企業に発展し、多くの雇用を創出した例が紹介された。

今回の中間会議で明かになった、ハイテク・高賃金時代からハイテク・低賃金時代への変遷の中での雇用創出などの課題には今後も継続的に取り組んでいくことになった。

(終)



●田東欧指導者の教育プログラムを幅広く行っている東西経済アカデミー(OWWA)で開かれた円卓会議

事務所近況

●若者向けMRA新マガジン創刊迫る
オーストラリアのMRAの若手が中心となり、MRAの新しい若者向けマガジン「グローバル・エクスプレス」誌(GE)の七月十一日の創刊に向けて準備が着々と進められています。

世界の動きを若者の視点から捉え、活発な意見交換を目指すGEは年四回発行される予定です。世界各地の情勢を現地の生の声で伝えるワールド・アイ、共通のテーマについてファックスで意見を交わすファックス・シンク・リンク、漫画や詩、話題の映画や音楽を紹介するクリエーティブ・エクスチエンジなど盛り沢山の内容です。

日本でも年間千八百円(送料込み)で購読できますので、ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

●第十八回MRA国際キャンペーン
来る十月八日(土)より十七日(月)にかけて、第十八回MRA国際キャンペーン(総合テーマ)「道義国家を目指してー共に生き、幸せを分かちあうために」が、小田原での国際会議(十月八日(土)～十日(月))を皮切りに、東京、浦和、神戸等で開催されます。特に今回は小田原と東京で国際シンポジウム(小田原は十月九日、東京は十月十二日の予定)の開催も予定しています。お問い合わせは事務局までお願いします。